<目指す主なＳＤＧｓのゴール>

３．中心市街地の活性化の目標

［１］中心市街地活性化の目標

第４期計画では、本市中心市街地が目指す都市像「観光・商業・交流による　にぎわいあふれる彩り豊かなまちづくり」を実現するために、以下の 2 つの目標を掲げ、各種事業を実施する。

【本市中心市街地が目指す将来像】

「観光・商業・交流による　にぎわいあふれる彩り豊かなまちづくり」

●商業面

【基本方針１】

街なかのにぎわいあふれるまちづくり

商業・居住・業務機能ややすらぎ空間などの都市機能のさらなる充実を図るとともに、街なかへの出店・創業を促す取組など、街なかのにぎわい創出を進めることにより、「街なかのにぎわいあふれるまちづくり」を推進する。

【目標１】

街なかのにぎわい創出と回遊性の向上

基本方針１「街なかのにぎわいあふれるまちづくり」を実現するためには、市街地再開発事業等によるにぎわい拠点の整備を推進するとともに、にぎわい拠点を生かした回遊性を高めていくほか、街なかのにぎわいづくり支援などを行い、市民など多くの方々の来街機会を増やしていく必要があることから、「街なかのにぎわい創出と回遊性の向上」を目標とする。

●観光面

【基本方針２】

街なか観光の魅力と機能を兼ね備えたまちづくり

歴史や食など多彩な地域資源の活用や宿泊につながるイベント等の充実による街なかならではの魅力向上を図るとともに、街なかで過ごし楽しむ観光機能の充実をさらに進めることにより、「街なか観光の魅力と機能を兼ね備えたまちづくり」を推進する。

【目標２】

都市型観光の推進

基本方針２「街なか観光の魅力と機能を兼ね備えたまちづくり」を実現するためには、誘客力のあるアミューズメント機能の充実や戦略的なマーケティング・プロモーションの推進を図るとともに、案内機能や受入体制の充実に努め、街なかにさらに多くの観光客を呼び込み、交流を増やし、滞在させていく必要があることから、「都市型観光の推進」を目標とする。

［２］計画期間の考え方

第４期計画の計画期間は、主要事業の完了時期及び事業の効果が発現される時期を考慮し、令和６年４月から令和11年３月までの５年間とする。

［３］目標指標の設定の考え方

本基本計画で設定した中心市街地活性化の２つの目標の達成状況を的確に把握するとともに、定期的にフォローアップが可能な指標であることを前提に、数値目標を設定し、目標の達成状況を進行管理する。

目標１　「街なかのにぎわい創出と回遊性の向上」に関する目標指標

目標指標１：　歩行者通行量

基本方針１では、「街なかのにぎわいあふれるまちづくり」を掲げ、街なかへの出店・創業を促す取組など、街なかのにぎわい創出を進めることとしている。「街なかのにぎわい」を表す指標としては、歩行者通行量、公共交通機関の利用者数、主要観光施設の入館者数などが考えられる。その中でも、歩行者通行量は、市内外の中心市街地への来街者を定量的に測定でき、街なかのにぎわいの状況を把握する指標として適切である。また、本市では毎年、中心市街地の商店街の歩行者通行量調査を実施しており、定期的にフォローアップが可能な指標であるとともに、分かりやすい指標である。

街なかのにぎわいや回遊性の状況を把握するため、来街者の動向を定量的に測定できる歩行者通行量を第１期及び第２期計画において目標指標、第３期計画では参考指標に設定したものの、目標の達成には至らなかった。中心市街地の活性化を図る上では、子どもや高齢者を含めた多くの人にとって気軽にまち歩きを楽しめる、にぎわいあふれるまちづくりを進めていくことが重要である。

また、本市は、「歩いて楽しい個性と魅力ある都市空間を創出する」という目標を掲げ、令和５年度より「歩いて楽しめるまちづくり推進事業」に取り組んでいる。このことから、目標１「街なかのにぎわい創出と回遊性の向上」を評価する指標として、「歩行者通行量」を設定する。

目標２　「都市型観光の推進」に関する目標指標

目標指標２：　宿泊観光客数

基本方針２では、「街なか観光の魅力と機能を兼ね備えたまちづくり」を掲げ、街なかならではの魅力向上を図るとともに、街なかで過ごし楽しむ観光機能の充実をさらに進めることとしている。

第１期計画からの継続した観光振興の取組により、中心市街地における宿泊観光客数は増加し、平成30年は345万3千人と、一旦は目標（322万人）を達成したものの、令和２年からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、急激に減少した。その後、社会経済活動の正常化が進みつつある中で、鹿児島国体等の開催やインバウンドのＶ字回復に向けた施策等を積極的に展開することにより、宿泊観光客数が新型コロナウイルス感染拡大前の水準まで回復すると想定している。

しかしながら、第４期計画期間中には大きなイベントが見込まれないことや、市全体でさ

らなる人口減少が見込まれることなどから、地域経済への影響等を踏まえ、宿泊観光客数を増加させる取組を強化していく必要がある。中心市街地には、観光資源が豊富であり、観光関連産業も集積していることに加え、世界文化遺産や桜島・錦江湾ジオパークなど、世界に誇れる観光資源にアクセスする交通インフラの拠点にもなっているが、観光客が中心市街地に滞在するための機能・取組はまだ十分とは言えない。

そのため、基本方針２に基づく取組を進め、誘客力のあるアミューズメント機能の充実や戦略的なマーケティング・プロモーションの推進を図ることにより、案内機能や受入体制の充実に努め、街なかにさらに多くの観光客を呼び込み、交流を増やし、滞在させていくこととし、目標２「都市型観光の推進」を評価する指標として、「宿泊観光客数」を設定する。

※「商業の活性化には居住人口の増加も重要」との中活協議会での意見等に基づき、今後施行される市街地再開発事業の事業内容（住居機能整備による入居者見込数など）が具体化した時点で、居住人口の目標設定について検討する。

目標指標１・２のほか、以下の指標を参考指標として設定する。

参考指標１：　空き店舗数

第３期計画においては、商業・サービス機能の強化状況を把握するため、空き店舗数を目標指標に設定した。

中心市街地外の大型商業施設やネットショッピングの利用拡大などにより、中心市街地における商業の集積度合いが相対的に低下し、市民の来街機会も減少している。また、中心市街地においては、多くの市民が魅力ある店舗や飲食店の出店を期待しており、活性化に必要な取組として空き店舗対策をあげる来街者も多い。

このことから、第４期計画においても、街なかへの出店・創業の促進、民間主導によるにぎわい創出等により、引き続き空き店舗対策に取り組み、2 つの目標指標を補完する参考指標として「空き店舗数」を設定する。

なお、「空き店舗数」については、第六次総合計画の基本目標「中心市街地の活性化」における令和 13 年度の目標値との整合を図ることとし、計画最終年度の令和 10 年度に 66 店舗を目指す。

参考指標２：　「中心市街地がにぎわっている」と感じる市民の割合

この指標は、第六次総合計画前期基本計画の基本施策「中心市街地の活性化」の目標指標となっており、市全域を対象とした市民意識アンケート調査により、市民のにぎわいに関する実感を把握するものであり、市民の生の声として、おしなべて感じているもの、年間を通じた中心市街地の活性化の状況が反映されると考えられることから、2 つの目標指標を補完する参考指標として設定する。

なお、「中心市街地がにぎわっている」と感じる市民の割合については、第六次総合計画前期基本計画の最終年度である令和８年度における市民意識アンケート調査の現況値を活用することとし、令和８年度に 43.9%の状態を目指す。

［４］目標値の設定

目標１「街なかのにぎわい創出と回遊性の向上」

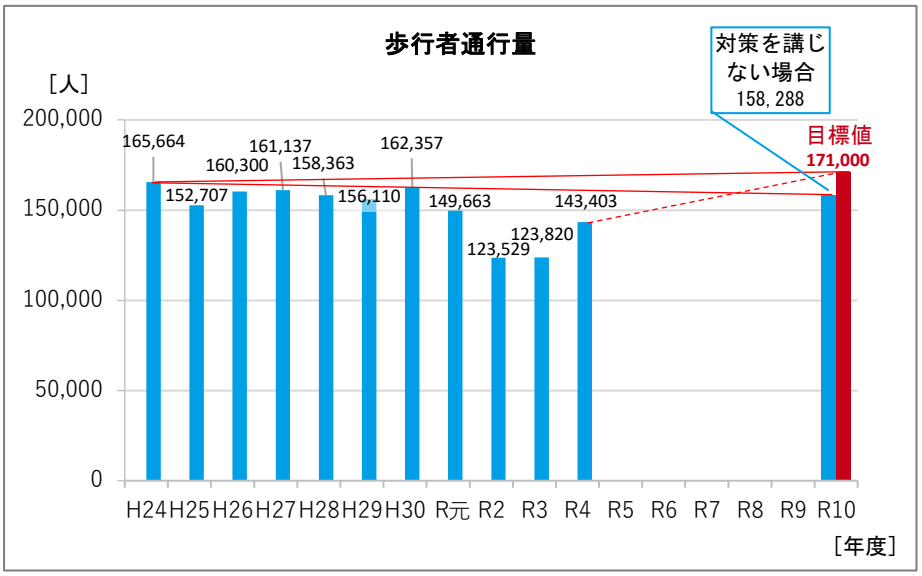
目標指標	基準値 （令和４年度）	推計値 （令和 10 年度）	事業による 効果	目標値 （令和 10 年度）
歩行者通行量	143, 403 人/日	158, 288 人/日	12, 712 人/日	171, 000 人/日

※中心市街地 30 地点における歩行者通行量調査（各年度 10 月実施）

(1) 目標年度の推計値

平成 24 年度以降の数値に基づく推計※を行い、158, 288 人/日を令和 10 年度の推計値とした。

※交通インフラ面で大きな転換点となった九州新幹線全線開通後の平成 24 年度から令和元年度までの平均値（新型コロナウイルス感染拡大の影響が見られた令和 2～4 年度は除く。）を目標年度の推計値とした。



(2) 事業による効果

■目標値の積算

	歩行者通行量（人/日）
目標年度（令和 10 年度）の推計値	158, 288
①加治屋町１番街区市街地再開発事業	＋3, 550
②まちなか建替え等促進事業	＋1, 380
③歩いて楽しめるまちづくり推進事業	＋3, 080
④甲突川千本桜再生プロジェクト事業 ⑤甲突川リバーサイド利活用事業	＋1, 540
⑥街なかリノベーション推進事業	＋690
⑦頑張る商店街支援事業 ⑧中心市街地にぎわい創出支援事業	＋310
⑨その他（にぎわい拠点の開業効果及び宿泊観光客数の増加）による効果	＋2, 090
合計 令和 10 年度目標値	170, 928（+12, 640） ≒171, 000（+12, 712）

①　加治屋町１番街区市街地再開発事業

陸の玄関である鹿児島中央駅と繁華街である天文館の２つのにぎわい拠点の間に位置する加治屋町１番街区において、商業施設や住宅を備えた再開発ビルの整備によりにぎわいとゆとりある都市空間の創出や良好な都市景観の形成を図る市街地再開発事業を推進する。再開発ビルが完成することにより、鹿児島中央駅といづろ・天文館地区間における回遊性が高まり、歩行者通行量の増加が期待できる。効果については、直近の市街地再開発事業を参考に見込む。

Ａ：中央町 19・20 番街区市街地再開発事業による歩行者通行量の増加

（歩行者通行量の調査地点；中央町 駅前広場側市道）

Li-Ka1920（R3 年 6 月全面開業）

全面開業前：5,447 人(R3 年 5 月)⇒全面開業後：9,998 人(R3.7～R4.12 の平均値)

4,551 人/日 増加

Ｂ：千日町１・４番街区市街地再開発事業による歩行者通行量の増加

（歩行者通行量の調査地点；千日町 Ｇ３アーケード）

センテラス天文館（R4 年 4 月全面開業）

全面開業前：8,990 人(R3 年 12 月)⇒全面開業後：11,551 人(R4.5～R4.12 の平均値)

2,561 人/日 増加

Ａ・Ｂの平均値：（4,551 人＋2,561 人）／２＝3,556 人≒3,550 人

Ａ・Ｂの平均値である 3,550 人/日の増加を見込む。

②　まちなか建替え等促進事業

地区の特性に応じた建築規制の緩和等について検討し、民間建築物の個別建替え等を促進する。当事業によりガラス張りの路面店が連続して並ぶまち並みの形成が図られ、歩いて楽しめるまちづくりの推進につながることから、歩行者通行量の増加が期待できる。

民間建築物建替え 6 棟×店舗新装に伴う来街者の増加 230 人※＝1,380 人/日

※来街者の増加人数については、過去の空き店舗数の増減と歩行者通行量の増減を比較し、平均値を参考に見込む。（新型コロナウイルス感染拡大期など相関関係がみられない年度は除く。）

平成 26 年度⇒平成 27 年度　空き店舗：4 店舗減少　歩行者通行量：837 人増加

1 店舗減少につき、歩行者通行量 209 人増加…ア

平成 27 年度⇒平成 28 年度　空き店舗：11 店舗増加　歩行者通行量：2,774 人減少

1 店舗増加につき、歩行者通行量 252 人減少…イ

1 店舗増減時の歩行者通行量変動人数の平均値＝（ア＋イ）÷2＝230.5 人

≒230 人

③　歩いて楽しめるまちづくり推進事業

鹿児島中央駅地区、いづろ・天文館地区、鹿児島駅周辺地区を結ぶ区域を歩いて楽しめる

まちづくりの推進を図るため、都市再生推進法人等のまちづくり団体が実施主体となるアーケード整備やイベント開催等を支援する。官民の連携により快適な歩行空間や公共空間を活用した新たなにぎわいや憩いの空間の創出が図られ、歩行者通行量の増加が期待できる。

・マイアミ通り歩いて楽しい空間づくり社会実験の結果を踏まえた本格実施による効果

令和５年度に実施するマイアミ通り歩いて楽しい空間づくり社会実験の結果を踏まえた本格実施による効果として、1,540 人/日※の増加を見込む。…ア

※甲突川左岸・右岸緑地利活用調査業務（キッチンカー実証実験等）における来場者数は、1,546 人/日であり、参考値とする。

・公園等を活用したにぎわい創出社会実験事業の本格実施による効果

公園等を活用したにぎわい創出社会実験事業として、中央公園において、キッチンカーや休憩施設等を設置する社会実験を行い、本格実施により、日常的ににぎわい空間を創出していくことにより、1,540 人/日※の増加を見込む。…イ

※上記アと同様の方法で見込んだ増加人数

ア＋イ＝3,080 人/日の増加

④　甲突川千本桜再生プロジェクト事業

⑤　甲突川リバーサイド利活用事業

中心市街地内の甲突川左岸・右岸緑地において、かつては千本以上あった桜並木を市民や民間事業者の協力も得ながら再生し、にぎわいと潤いが共存する新たな桜の名所として整備する（サクラ：約 500 本、クスノキ・イチョウなど：約 500 本）。

また、甲突川河畔において、民間活力を導入し、キッチンカー等による新たなにぎわいの創出に取り組む。

新たな桜の名所としての整備や各種イベントの実施などにより、市民はもとより、市外からも多くの来街者が見込まれることから、歩行者通行量の増加が期待できる。効果としては 1,540 人/日※の増加を見込む。

※令和４年度に実施した甲突川左岸・右岸緑地利活用調査業務（キッチンカー実証実験等）における来場者数は、1,546 人/日であり、参考値とする。

⑥　街なかリノベーション推進事業

遊休不動産のリノベーション手法を活用したエリア価値の向上と人材・組織の育成を図るため、街なかリノベーション実践セミナー等を開催する。空き店舗等の再生を担う人材育成を通じ、街なかへの出店促進や民間主導によるまちづくりの推進が図られることから、歩行者通行量の増加が期待できる。効果としては、計画期間中に、3 件の空き店舗再生の実現を見込む。

空き店舗再生 3 店舗×新規出店に伴う来街者の増加 230 人※＝690 人/日

※②まちなか建替え等促進事業と同様の方法で見込んだ増加人数

⑦　頑張る商店街支援事業

⑧　中心市街地にぎわい創出支援事業

中心市街地の活性化を図るため、商店街等が、独自のアイデアや創意工夫を生かし、にぎわいの創出につながる集客型イベントや回遊性促進型イベント、装飾事業等に対し助成を行う。活気あふれる商店街づくりの推進により、集客力の向上が図られることから、歩行者通行量の増加が期待できる。効果としては、年間を通して様々なイベント等を実施することで、中心市街地全体がにぎわい、来街頻度が増加することから、310 人/日の増加を見込む。

各支援事業：　31 事業※×　各事業の取組による効果：　10 人/日＝　310 人/日

※頑張る商店街支援事業：29 事業＋中心市街地にぎわい創出支援事業：2 事業

（参考）・　補助実績　令和 4 年度：31 事業

頑張る商店街支援事業　　令和 4 年度：29 事業

中心市街地にぎわい創出支援事業　令和 4 年度：2 事業

⇒　年間 31 事業実施されることで月 3 回程度のイベント実施が見込まれる。

・　照国表参道歩行者天国社会実験（令和 4 年度）の来場者数：約 6,500 人

⑨　その他（にぎわい拠点の開業効果及び宿泊観光客数の増加）による効果

①～⑧に掲げた事業のほか、第３期計画において完成したにぎわい拠点（Li-Ka1920 及びセンテラス天文館）の開業効果として、令和 4 年度に一定の効果はあったものの、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、効果が十分に発揮されていないと捉え、今後、様々なイベント等との相乗効果により、歩行者通行量を過去最高の平成 30 年度並みに増加すると見込む。

また、宿泊観光客数の増加に向けた取組により、街なかの魅力が向上し、街を散策する観光客等が増加することに伴い、歩行者通行量の増加に一定の効果があると見込む。

Ａ：Li-Ka1920 による令和 4 年度の開業効果　4,551 人/日 増加

Ｂ：センテラス天文館による令和 4 年度の開業効果　　2,561 人/日 増加

Ｃ：平成 30 年度の歩行者通行量／令和 4 年度の歩行者通行量

162,357 人／143,403 人≒113.2%

開業効果による歩行者通行量増加見込み　（Ａ×Ｃ）＋（Ｂ×Ｃ）

（4,551 人×13.2%）＋（2,561 人×13.2%）≒938 人…①

宿泊観光客数増加に向けた各種事業による増加数：421,000 人※÷365 日＝1,153 人/日…②

※宿泊観光客数の目標値（令和 10 年）－推計値（令和 10 年）＝421,000 人

①＋②＝2,091 人≒2,090 人

目標２「都市型観光の推進」

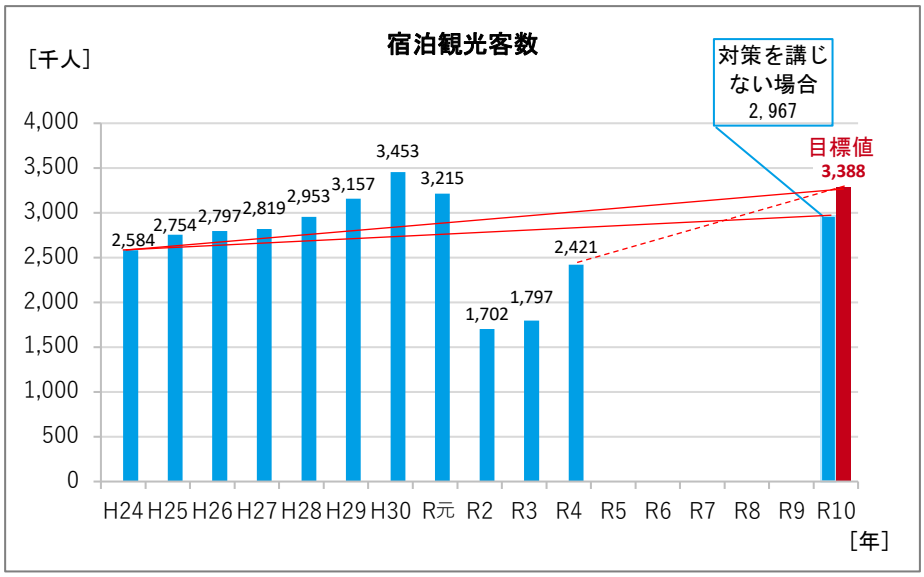
目標指標	基準値（令和４年）	推計値（令和 10 年）	事業による効果	目標値（令和 10 年）
宿泊観光客数	242 万 1 千人	296 万 7 千人	42 万 1 千人	338 万 8 千人

※市観光統計を基に中心市街地分を算出（各年 1～12 月分）

(1) 目標年の推計値

平成 24 年以降の数値に基づく推計※を行い、296 万 7 千人を令和 10 年の推計値とした。

※交通インフラ面で大きな転換点となった九州新幹線全線開通後の平成 24 年から令和元年までの平均値（新型コロナウイルス感染拡大の影響が見られた令和 2～4 年は除く。）を目標年の推計値とした。



(2) 事業による効果

■目標値の積算

	宿泊観光客数(万人)
目標年（令和 10 年）の推計値	296.7
①観光情報多言語化モバイル活用事業 ②インバウンド向けフードダイバーシティ（食の多様性）推進事業 ③海外プロモーション推進事業 ④アフターコロナ・リカバリーサポート事業 ⑤ユニバーサルツーリズム推進事業	38.8
⑥鹿児島ぶらりまち歩き推進事業 ⑦観光ＣＲＭアプリ推進事業 ⑧ＤＭＯ推進事業 ⑨アフターコロナ・リカバリーサポート事業（再掲） ⑩ユニバーサルツーリズム推進事業（再掲）	3.3
合計 令和 10 年目標値	338.8（+42.1） ≒338.8（+42.1）

①　観光情報多言語化モバイル活用事業
②　インバウンド向けフードダイバーシティ（食の多様性）推進事業
③　海外プロモーション推進事業
④　アフターコロナ・リカバリーサポート事業
⑤　ユニバーサルツーリズム推進事業

世界文化遺産やジオパークにアクセスする交通インフラの拠点となっている中心市街地において、海外から本市を訪れる観光客向けの観光オブジェなどに関する４か国語対応の解説動画をスマートフォンなどで視聴可能なシステムの整備及びサービスの提供や、ムスリムやベジタリアンなど食の多様性に関する受入体制の充実、多言語化対応やユニバーサルツーリズムの推進等に向けた世界標準の受入及び案内機能の充実に対する支援等を通じた観光客の視点に立ったきめ細かな受入体制づくりにより、観光客の満足度を高め、外国人宿泊観光客数の増加を見込む。なお、各種事業の取組により新型コロナウイルス感染拡大前の水準まで戻すことを目標とする。

（参考）第４期鹿児島市観光未来戦略　コア・プロジェクト
アフターコロナ・リカバリープロジェクト　～インバウンド～
施策１　インバウンド誘客に向けた魅力づくり
（主な取組）
・　体験型観光メニューの充実に向けた取組
・　ナイトタイムエコノミーの推進
・　誘客につながる九州内や県内の観光都市・地域との連携の充実
施策２　幅広い視点による誘客
（主な取組）
・　市場のニーズを踏まえた効果検証可能なプロモーション
・　クルーズ船の経済効果拡大に向けた取組
施策３　安心して観光できる受入環境の整備
（主な取組）
・　高いスキルの観光ガイドの育成
・　観光案内所の充実
・　インバウンド向けフードダイバーシティ（食の多様性）推進

【中心市街地における外国人宿泊観光客数の増加】
405,000 人（A）－17,000 人（B）＝388,000 人
A：中心市街地における新型コロナウイルス感染拡大前（令和元年）の外国人宿泊観光客数
B：中心市街地における令和４年の外国人宿泊観光客数

⇒　中心市街地における外国人宿泊観光客数の増加：38.８万人

⑥　鹿児島ぶらりまち歩き推進事業
⑦　観光ＣＲＭアプリ推進事業
⑧　ＤＭＯ推進事業
⑨　アフターコロナ・リカバリーサポート事業（再掲）

⑩　ユニバーサルツーリズム推進事業（再掲）

市民や国内観光客に対し、気軽にまち歩きを楽しめるように、主要観光地にボランティアガイドを配置するとともに、付加価値の高いコースを提供し、ボランティアガイドの解説を受けながら気軽にまち歩きを楽しめる「鹿児島ぶらりまち歩き」を実施する。

また、観光ＣＲＭアプリを活用した地域マーケティングにより宿泊観光客の増加を図るとともに、ＤＭＯの設置を視野に入れた取組を推進するため、コンベンション協会の組織体制を充実・強化し、観光客の誘致・受入体制の充実を図ることにより、宿泊観光客数の増加を見込む。なお、各種事業の取組により新型コロナウイルス感染拡大前の水準まで戻すことを目標とする。

【中心市街地における日本人宿泊観光客数の増加】

中心市街地のスポット・施設の中で上位にランクインしている「かごしま水族館」※について、中心市街地における宿泊観光客が訪れる代表的な観光施設と想定し、同施設の利用者数のうち県外の利用者数を中心市街地における日本人宿泊観光客数とみなし、その増加を見込む。

※地域経済分析システム（RESAS）による鹿児島市内の目的地検索ランキング（自動車利用）

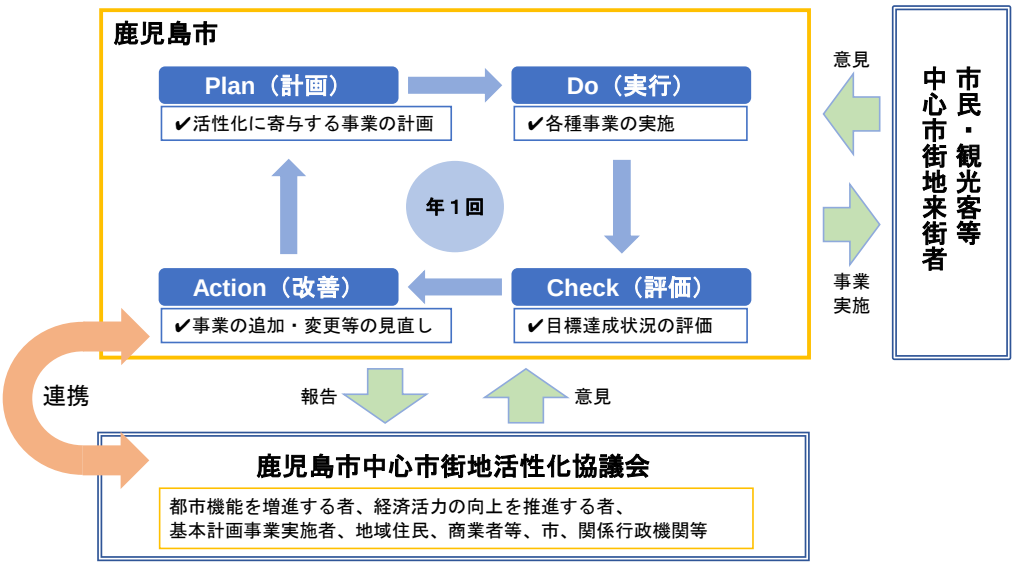
かごしま水族館利用者数　　令和元年：665,946 人　令和４年：560,566 人

減少数 105,380 人×県外割合(R4 調査)32%＝33,721 人

≒33,000 人

⇒　中心市街地における日本人宿泊観光客数の増加：3.3 万人

［５］フォローアップの時期及び方法

設定した目標指標については、いずれも計画期間の各年度に、目標指標の現況値や事業の進捗状況を把握し、達成状況を確認する。また、達成状況に応じて、事業の追加や内容変更など目標達成に向けた措置を講じる。計画期間終了後は、目標指標の達成状況を確認するとともに、中心市街地活性化への効果を検証する。

■ＰＤＣＡサイクル実施概要図